

令和7年11月15日(土)

おはようございます。いつものことですが、塚越さんの開会挨拶は素晴らしいですね。良い挨拶だなと思って、聞いておりました。あれほど良いご挨拶をされると、やはりそれについて一言二言申し上げたくなりますので、まずはその点からお話したいと思います。

学びは人生を豊かにするというお話は、まさにその通りだと感じています。人生が豊かになると人生の喜びに繋がりますが、その中でも知らない事を知る喜びは格別です。自分が疑問に思っていた事を、これは一体何だろうと調べ、人に尋ね、それでも分からなければまた調べる。そうした繰り返しの中で、何かのきっかけで、ふと理解出来る瞬間があります。その瞬間は本当に嬉しいものです。私自身も、こうした経験を何度も重ねて参りました。

しかし、その出発点となる、これは何だろう、どういう意味なのだろう、という疑問が生まれない人生もあるようです。だからこそ、物事に疑問を抱く習慣が大切であり、疑問に思ったら、分かるまで追いかけて続ける姿勢が必要だと感じます。

そうして追いかけていくと、途中でふと理解出来る瞬間が訪れます。これは大変嬉しいものです。嬉しさのあまり自然に身体が動きます。陽明学を創設した王陽明は、長い間理解できなかった事が分かった時、欣喜雀躍で立ち上がり、踊り狂って喜んだと伝えられています。

分からないことが分かると、もう嬉しくて嬉しくて、体中が動き出す感覚です。今の時代はそういう喜び方をする人は滅多にいません。ノーベル賞を受賞された先生方でさえ、喜びのあまり乱舞する話はあまり聞きません。

ですから人間全体としてはまだまだレベルが上がっていない、かえって下がっているのではないかと感じます。疑問を持つことは、素晴らしい人生を歩む為の出発点だと思います。

先程塚越さんが誰に教わるかが大事と言われましたが、これも何度かお話しています。私が師匠と呼ぶ方は木内信胤先生お一人だけです。もちろん、教えて下さった先生方は大勢いらっしゃいます。しかし、師匠と呼ぶ場合は、その先生の全人格に圧倒され、木内先生の前に立つと自然に背筋が伸び、直立不動の姿勢になってしまう、そういう存在だったからです。

以前、中齋塾フォーラムの前身である悟道会に木内信胤先生をお迎えしてお話を伺ったことがあります。その後、「深澤さんはいつもより丁寧で、背筋をピンと伸ばしていたね」と、色々な方から何度も言われました。先生を前にし、普段の私とは違ったようです。

木内信胤先生には、何度も色々な質問を致しました。先生はいつも「何を質問してもいいよ、何でも答えるから」と言って下さいました。実際、先生ご自身が良く考え、深めてきた事については、きちんとした答えを返して下

さるのですが、自分の知らない事については、「知らないので、これから勉強します」とおっしゃるのです。

これは簡単に言えることではありません。多くの方は、知らないことを素直に知らないと言えないものです。しかし、自分の専門を徹底的に追求し、身に付けたものがある人ほど、これについては何でも言えるという領域を持っている為、逆に知らない事を聞かれた時、素直に知らないと言えるのだと思います。

私は木内先生とお会いしてから、様々な事を考えるようになり、知らない事を聞かれた時、素直に知らないと言うようになりました。知らないと答えると調べる気になりますし、詳しいと思う方には積極的に尋ねるようになります。そうして自分なりのネットワークのようなものを構築しましたので、知らない事が出てきたら、これは誰に聞けばいいのか、何を確認すればいいのか、すぐ頭に浮かぶようになりました。これからも、知らない事は知らないと言える自分でありたいと思っています。

木内先生には、多くの大切な言葉を戴きました。例えば先手必勝、挨拶をする。挨拶はやはり先手必勝が良いそうです。剣道の竹刀を相手の額に届くような距離で振り下ろさなければ意味が無いように、離れた場所からどれだけ裂帛の気合で挨拶しても、相手には届きません。

挨拶も立ち位置を意識し、距離感を大事に出来ると良いと思います。

今朝も山崎先生に棒術を教えて戴きました。その際先生が今音楽を習っておられる話を伺い、まるで赤ん坊に戻ったような素直な気持ちで学んでいるのだなと感じました。ここで少し、音楽の大切さについてお話したいと思います。

中国に「周」という時代があります。その時代、孔子のもとには、様々な国の高級官僚、現代で言えば内閣総理大臣のような地位を目指す人達が集まってきました。孔子の下で学ぶと、各国から良い待遇でお迎えしたいと声がかかります。そうすると、何を学んできたのかが重要になります。皆其々に専門分野を極め、知識や人格を磨き、どこへ出ても恥ずかしくないと自分で思える程になっても、音楽が身に付いていなければ、高級官僚としては登用されなかったようです。ただ学問を増やすだけではなく、人格が素晴らしいと認められる為には、音楽の素養が欠かせませんでした。

孔子は詩を学ぶ重要性を説いています。詩を学ぶには、読んだ時中身がずっと心に入り、感動を覚えるようなみずみずしい感性が必要です。

詩を学んだら、その詩を表現する為のメロディーが必要になります。詩を楽（メロディー）に乗せて自分の心に深く染み込ませる。すると、内側から感動が湧き上がってくるようになります。その経験を何度も積み重ね、周囲からこの人は音楽が分かったと認められるようになり、ようやく政治家や高級官僚になる資格が生じる。周の時代にはそう考えられていたと記されています。

政治を担う者にとって音楽は絶対に必要で、そうした志を持つ人々が孔子

の下に集まり、人格が完成したと認められなければ、孔子は弟子たちを外へ送り出さなかったと言われています。魯の国ではそれ程音楽が不可欠でした。

これを今の日本に置き換えるなら、官僚のトップを目指す人や政治を志す人も、音楽を身に付けていなければならない、ということになります。

洪澤栄一曰く、日本の政治家は音楽を身に付けていない。官僚もまた同じであり、なぜなら、日本には中国で言うところの人格を磨く音楽に相当するものが存在しないからだ。

日本の音楽も素晴らしいものはあるが、多くが西洋音楽に影響されている。例えばオーケストラを見ても西洋の方が一段と優れていると感じる。これを極めれば人間的にも高められるが、日本の場合、明治維新頃の音楽は芸人のものであり、一流の人物が身に付けるべき学問としては確立されていなかった。洪澤栄一は後世に期待するしかないと言っていたようです。

山崎先生が現在、音楽に打ち込んでおられるということは、まさに人格を深める方向へ進んでおられるのだと感じます。塚越さんの挨拶で、話しておきたい内容を話すきっかけを戴き、有難く存じます。

論語素読

論語の素読に参ります。冒頭で学びを取り上げましたが、関連する内容が沢山ありました。学ぶことは、自分自身が間違えた時、過ちを犯した時、失敗やミスをした時こそ、本当に身に付くものだと思います。学びという考えがなければ、どれだけ過ちを犯しても、それを自分のものにすることは出来ません。

では、全員で素読致しましょう。

(素読)

① 子 曰く、丘や幸なり。苟も過ち有れば、人必ず之を知ると。

(述而第七・30)

② 子 曰く、過ちて改めざる、是を過ちと謂う。

(衛霊公第十五・29)

③ 哀公問う、弟子孰れか学を好むと為すと。孔子対えて曰く、顔回という者有り、学を好めり。怒りを遷さず。過ちを貳びせず。不幸短命にして死せり。

(雍也第六・2)

④ 子 曰く、已んぬるかな。吾未だ能く其の過ちを見て、内に自ら訟むる者を見ざるなり。

(公治長第五・26)

⑤ 子 曰く、人の過ちや、各其の党に於てす。過ちを觀て斯に仁を知る。

(里仁第四・7)

- ⑥ 子貢^{しこう いわ} 曰く、君子^{くん し}の過^{あやま}ちは、日月^{じつげつ}の食^{しょく}の如^{ごと}し。過^{あやま}てば人^{ひと}皆^{みな}之^{これ}を見る。
更^{あらた}むれば人^{ひと}皆^{みな}之^{これ}を仰^{あお}ぐ。

(子張第十九・21)

- ⑦ 子^し 曰く、過^いちては則^{すなわ}ち改^{あらた}むるに憚^{はばか}ること勿^なかれ。

(学而第一・8)

有難う御座居ます。なんとなく意味が伝わってきますね。今日はここに7つ書きましたが、解説をして参りますので、この中からどれか一つ、この言葉が良いと思う、このセリフが好きだ、これは覚えておきたい等、何か心に残るものを選んで戴ければと思っております。

では、説明に参りましょう。

- ①子^し 曰く、丘^いや幸^{きゅう}なり。苟^{さいわい}も過^{いやく}ち有^{あやま}れば、人^あ 必^{ひと}ず之^{かなら}を知^{これ}ると。

(述而第七・30)

子^し 曰く、丘^いや幸^{きゅう}なり。

子は孔子のことで、丘も孔子の名前ですので、丘や幸いなりとは、私は幸せ者だという意味になります。なぜ孔子は自分を幸せだと言ったのでしょうか。

卑しくも過ちあれば、人 必^{ひと}ず之^{かなら}を知^{これ}ると。

私(孔子)が何かで過ちを犯した時、人は必ずそれを知る、ということですよ。普通であれば、人は誰かの間違いを心の中にしまったまま、わざわざ本人に指摘しないものです。しかし孔子の場合は、見ていた人や聞いていた人が「孔先生、ここは間違えていますよ」と、面と向かって教えてくれるのです。自分の誤りを率直に指摘してくれる人は、なかなか身近にいるものではありません。間違えた事を指摘してくれる人が周りいることが孔子にとっては大変有難く、私は幸せ者だと言ったようです。

ただ、この言葉は背景を知らないと少し分かりにくい所があります。ここでは、その背景を踏まえて簡単に解説致します。

この章句は、孔子が物知りとされていた事に対し、疑問を持っていた陳の司法大臣が、孔子に質問をした場面です。当時、孔子は魯という国に仕えておりました。魯には昭公という君主がおり、その昭公について、陳の大臣が孔子に「あなたの君主は“礼”を心得ておられますか」と尋ねたのです。

その問いに対して、孔子は「私共の君主は、礼を心得ております」と答えました。大臣はさよう御座居ますかとその場を離れたのですが、すぐには帰らず、孔子の弟子達に向かって皮肉を込めて言いました。

「昭公は礼儀を知らないことで世の中に知られているのに、孔先生は主君をかばうのですか。主君をかばうようでは、孔先生は本当に君子と言えるのでしょうか。」

礼知らずと非難された訳は、昭公は自分と同じ姓の女性を妻に迎えたことを隠す為に偽りの名を名乗らせた点です。当時の中国では、同姓の者同士が結婚することは禁止されていました。魯の君主は「姫（き）」という姓であり、迎えた妻も呉という国の「姫」姓の出身だったので、同じ姓同士の婚姻でした。

これを非難されたくなかった昭公は、本来名乗るべき姓を避け、呉姫ではなく呉孟子（ごもうし）と称して、同姓でないかのように見せたのです。こうした行為が礼を知らないと世間で言われていたのに、なぜ孔子は主君をかばったのか、と大臣は弟子達に問いかけたのです。

弟子からこの事を聞いた孔子は、私は幸せ者だと言いました。それは、孔子が自分の行いが過ちであったと認めたことを意味します。主君の非を承知していながら、それを家臣として認めることが憚られ、表向きかばってしまった。しかし、それを指摘してくれた人がいたおかげで、自分の過ちを公けに認められた。孔子はそのことに感謝したのです。

これは、木内信胤先生の「それは知らない。これから学びます」という姿勢にも通じるものがあります。質問してきた大臣は、孔子が怒り出すことを想定していたかもしれません。しかし孔子は、相手の指摘を素直に受け入れ、教えてくれて有難う御座居ますと感謝に変え、対立を生まずにその場を収めました。

人との関わりにおいて、自分が間違った時、素直に認めることが大切であり、それが対人関係を円滑にする、そのような意味も込めて、この話が論語に編まれたのでしょう。

② 子^し曰^{いわ}く、過^{あやま}ちて改^{あらた}めざる、是^{これ}を過^{あやま}ちと謂^いう。（衛霊公第十五・29）

これは先程の話とは逆ですね。間違いを指摘されても知らないふりをする人は多いものです。知らないふりと言っても、二つのタイプがあります。

一つは、自分が過ちを犯したという自覚が全く無い人です。無自覚のまま知らないふりをしてしまうタイプです。

もう一つは、指摘が胸に刺さっているのに認めたくない気持ちが働き、改めないタイプです。自分でも間違いだと思いうけれど、認めたくない状態です。

孔子がここで言っているのは、後者に対してです。失敗した、間違いだったと心のどこかで分かっているが、改めずに受け流してしまう。その時点で真の過ちを犯したと思って下さい。⑦子^し曰^{いわ}く、過^{あやま}ちては則^{すなは}ち改^{あらた}むるに憚^{おそ}ること勿^なかれ。も同じ趣旨のものです。子罕篇にも同じ言葉があります。それだけ大きいテーマということです。

③哀公^{あいこう} 問^とう、弟子^{ていし} 孰^{いず}れか学^{がく}を好^{この}むと為^なす。孔子^{こうし} 対^{こた}えて曰^{いわ}く、顔回^{がんかい}という者^{もの}有^あり、学^{がく}を好^{この}めり。怒^{いか}りを遷^{うつ}さず。過^{あやま}ちを貳^{ふた}びせず。不幸^{ふこう} 短命^{たんめい}にして死^しせり。

(雍也第六・2)

哀公という人は、あまり優れた人物ではなかったようです。哀公が「あなたのお弟子さんの中で、学問好きだと言える人は誰ですか」と聞きました。孔子は顔回を挙げ、怒っても周りに当たり散らすようなことはしない人物だったと返事をしました。

私自身の話になりますが、最近あまりしなくなりましたが、腹が立つと、以前は机を叩くこともありました。家内は私のことを、怒りが一気に噴き上がり我慢できなくなると、瞬間沸騰すると言います。

顔回は周囲に当たり散らすことをしなかったし、同じ過ちを二度と繰り返さない人物でした。しかし、残念ながら若くして亡くなってしまいました。孔子は、自分の後継者は顔回だと考え、安心していたところでしたが、顔回は32歳で亡くなりました。孔子は70代ですから大変落胆し「天は私を見放した。私から後継者を奪うとは、天は私を見放した」と嘆きました。後継者が先に亡くなるというのは、本当に悲しいことだったのでしょう。

④子^し 曰^{いわ}く、已^やんぬるかな。吾^{われ} 未^{いま}だ能^よく其^その過^{あやま}ちを見^みて、内^{うち}に自^{みづか}ら訟^せむる者^{もの}を見^みざるなり。(公冶長第五・26)

已んぬるかなは、世も末だという意味です。孔子は当時の世の中を見て、もうどうしようもない、世の中はどうにもならないと感じ、その心情が表れたのでしょう。

吾 未だ能く其の過ちを見て、内に自ら訟むる者を見ざるなり。

自分自身で過ちを認めることは難しく、自分の間違いを深く反省し、改めようとする姿勢は、非常に立派です。そうした姿勢を持つ人は人格が磨かれ、大変優れた人間になると孔子は考えていたのでしょう。自覚して自らを改める人は非常に少ないので、それが出来る人は素晴らしいと捉えていただければ良いと思います。

⑤子^し 曰^{いわ}く、人^{ひと}の過^{あやま}ちや、各^{おのおの} 其^その党^{とう}に於^{おい}てす。過^{あやま}ちを觀^みて斯^{ここ}に仁^{じん}を知る^し。

(里仁第四・7)

今政治が面白くなってきましたから現代に当てはめてみましょう。日本には様々な政党があります。自民党は自民党なりの間違いをするし、立憲民主党には立憲民主党らしい誤りがある。公明党、日本維新の会、参政党など、其々が自分たちのカラーや体質を反映した間違いを犯すものだ、というイメージです。

元の文脈では、村や町といった地域ごとの風土や雰囲気によって、起きる過ちの種類が違ってくるとお考え下さい。

過ちを觀て斯に仁を知る

間違い方を見ると、その人が出来た人間かどうか見えるものです。失敗した時こそ、人の本性や性格がはっきり表れます。会社で例えるなら、失敗した時の対応によって、その会社の人格とも言える社格が自然と見えてきます。

渋澤栄一がこの言葉をどう説明したかをご紹介します。渋澤栄一は、人について色々語る人でしたので、その点が面白いと思います。

まず、明治維新の頃には多くの豪傑がいたと述べます。その中で西郷隆盛については、仁愛に過ぎた結果、過ちを犯したと言っています。西郷は人に優し過ぎて判断を誤り、西南戦争を起こして多くの犠牲を生んでしまった。こうした点を、渋澤栄一は西郷の過ちとして挙げ、たとえ仁愛を身に付けた人物でも誤りが生まれることがある、という逆説的な説明をしています。

次に木戸孝允についてです。基本的には仁愛の傾向が強い人物としています。明確な過失を認めていませんが、もし木戸孝允に誤りがあったとすれば、人に親切すぎるゆえのミスであっただろうという見方を示しています。

これに対し、江藤新平については残忍な性質があると評しています。渋澤栄一の記述によれば、江藤は人に接するとまずその人の邪惡な点を見抜こうとするタイプで、長所を見るのは後回しだったとされています。よくここまで他人について言うなと思いますが、その後江藤が佐賀の乱で担がれた際も、西郷隆盛とは異なり、仁愛から出た行動ではないとの解説を加えています。

大久保利通については、西郷と江藤の中間に位置する人物で、仁愛は半分程だと述べています。江藤新平が乱を起こした際、大久保は裁判をせず即座に処刑、さらし首にしたことで知られていますが、渋澤栄一は、大久保利通だからそこまでやるのだろうと見ていたようです。

また、公家の三条実美については、外柔内剛で見た目は柔らかいが内面は強い人物であり、なおかつ仁愛の持ち主であったと評価しています。ただし、意思がやや弱く、状況に応じて考えが揺れやすいところがあったと判断していたようです。

渋澤栄一は、人を論じる際、明治維新の三傑や、自身が関わった大隈重信・井上馨などについても、かなり辛辣なことを書いています。人を厳しく批評するのは控えめにしたほうが良いのではないか、という気が致します。

⑥子貢 曰く、君子の過ちは、日月の食の如し。過てば人皆之を見る。
更むれば人皆之を仰ぐ。（子張第十九・21）

面白い説明ですね。子貢はとても頭が良いと言われている人でした。周りの人々から子貢は孔子より頭が良いのではないか、孔子より優れた人物ではないか、と言われる事があったようです。そのとき子貢は「私はそんな者ではございません。私は弟子であり、孔先生が私の師でございます」常にそのように答えていたと言います。

孔子が過ちを犯したとしても、それは日食や月食のように、誰の目にも明らかである、という意味です。孔子は過ちを隠さず、隠蔽もしません。率直に認めるので、孔子が誤ったことは誰にでも分かるのです。

そして孔子は間違えた以上、改めなければならないと実際に改めます。その姿勢もまた、誰の目にも明らかです。過ちを認め、正す姿を見ると、孔子は本当にすごい、素晴らしい人物だということが自然と人々に伝わります。子貢は、「私はそのような点で孔子には到底及びません」と説明しています。

時事評論

前回、令和7年は挑戦の年であると申し上げましたが、今回はその挑戦をどのような意味で使ったのか説明すると話しておりましたので、今からそれについてお話します。

今年の干支は乙巳（いっし）。乙巳の年は乱れが起こり、世の中が混乱すると言われます。巳は蛇を表しますが、蛇は脱皮をします。

令和7年、今年は大きく乱れたかということ、実際それ程乱れていないと思います。流れが繋がっていて、多少の混乱はあったものの、決定的な乱れではありません。ただ、自民党の内部では、国政選挙で2回連続敗北し、少数与党になってしまったことで、自民党としては大変困った大きな変化の年だったと言えます。

全体的に眺めてみると、来年は相当大きな変化が起きると感じています。今年はその前兆が見えた年だったと思います。政治の面で言えば、大きく乱れる予兆が出てきました。その象徴が、女性の首相が誕生したことです。乱れたとは言えないまでも、大きく変化したと言える出来事でした。高市さんが首相として登場したことで、時代が変わったと感じました。

時代がどう変わったのか。まず、高市さんが総理大臣として認められた直後に言った「働いて・働いて・働いて・働いて・働いてまいります」という言葉に、変わったなと思いました。

ここで皆さんに意識していただきたいのは、言葉の表面だけを受け取らないで欲しいということです。高市さんは働くことを強調しているから、これ

からたくさん働くのだなとそのまま捉えるのではなく、中斎塾フォーラムとしては、その発言は何を意味するのかを深く考えて載せたいと思います。

総理大臣があれば「働く」と繰り返したということは、「働くことは良いことだ」というメッセージを世界に向けて発信したということになります。もちろん国内にも、働くことは良いことだと伝えたわけです。

最近の日本では、働くことは悪いことだという意識が広まっていました。欧米の感覚では、働くことは贖罪、罪滅ぼしの為に働かされているという意識があります。そうした価値観と、働くことは良いことだと考える日本の価値観がぶつかっていたのです。

日本でもこれまで、働くことは罪滅ぼしであり、悪いことだという印象が繰り返し刷り込まれてきました。労働基準法の改正などもあり、残業のし過ぎは良くない、過労死するではないか、という流れが強くなっています。

そうした世の中の流れに対して、高市さんは無意識とはいえ、真正面から挑んだ形になりました。総理大臣になって嬉しい、だからこれからしっかり働かなければならない。その素直な気持ちから「働く」と言ったのだと思いますが、冷静に見ると、日本は世界の国々とは違う、働くことを肯定する国だという意思表示をしたことになります。これが第一のポイントです。

さらに働いて、働いてと言った以上、当然その後の課題にも向き合う必要が出てきます。過労死などの問題についても研究・検討を始めることになり、政府は働くことについてもう一度見直そうという方向へ動き出しました。これは公権力を持つ総理大臣の発言だからこそ、現実の政策として動き始めたのです。こうして、時代の流れは大きく変わり始めています。

日本が世界に向けて発信する姿勢も、自国内での政府の動き方も変わってきました。そして、図らずも明らかになったのが高市さんの午前3時出勤問題です。夜が明ける前はかなり早い時間です。それをやめておけばいいのに立憲民主党が迫及しました。しかし、その迫及によって、かえって裏側のカラクリが見えてきたのです。

立憲民主党はそんな早く出勤したことで、100人程の関係者が迷惑を受けていると批判しました。すると高市さんは答弁書が出てくるのが遅かったと返したのです。答弁書が届いてから、それをしっかり読み込み、自分の考えで正しく答えたいと思えば当然準備が必要になります。

では、なぜそんなに答弁書が遅いのか。高市さんがその場で直接言ったわけではありませんが、他党は比較的早い時間に答弁書を送るのに対し、立憲民主党だけは前日の夕方6時に答弁書が届くことが多いというのです。しかも、それは偶然ではなく、毎回午後6時に持ってくるのが慣例という話でした。これは総理大臣を寝不足にさせたい、混乱させたい、失敗させたいとの意図があるのではないかと思います。

答弁書を受け取ってから作業をすると、どうしても夜中を過ぎてしまう。それが積み重なり、早朝出勤になりみんなに迷惑をかけていると立憲民主党は批判しましたが、そもそもの原因を作ったのは立憲民主党ではないか、という構図が透けて見えました。

高市さんはこのような状況が続き、睡眠時間が2時間、多くて4時間という状態だそうです。昔、ピンクレディーが全盛期に1日2時間ほどの睡眠で

活動していたという話があります。高市さんはまさにそのレベルで総理大臣を務めていることになります。そのような状態は長くは続かないでしょう。

このように、働いて、働いてという言葉から見えてきたのは、政治の仕組みです。日本が世界にどう発信していくのか、国内の政党がどのような仕組みで動いているのか、そして高市さんという人物が自分の発言が間違っていたとしても、間違いとは認めず押し通すタイプであることも見えてきました。これは、今後中国などと衝突する場面があったとしても引かずに進む姿勢を示したとも受け取れます。私は今回の一連の言動を見て、そのように感じました。

高市さんが今後どのように動くのか、様々な出来事から方向性が見えてきたと思います。来年日本は色々な形で大きく動くでしょう。

韓国はトランプさんと会談した際、2030年までに250億ドルの軍事装備品を購入すると述べ、在韓米軍に対しては多額の支援を行うと伝えました。さらに、韓国が原子力潜水艦を今後建造するにあたり、アメリカは文句を言わないという姿勢を示し、その燃料はアメリカから購入する形で提供されることになっています。こうした動きによって、韓国は軍事大国の道を着実に進んでいると感じます。

一方で、北朝鮮には核を持たせないという点で、韓国とトランプ氏の間で意思統一が図られたように見えます。いつでも火がつく寸前にまできな臭さが高まっていると感じます。こうした状況では、火がつかない方がおかしいと思えます。

さらに、台湾有事は日本有事であるという認識は以前から広くありましたが、今回は現職の総理大臣がそれを述べた為、中国は「これは過ちである」と強く反発し、日本を叩かなければならないと躍起になっています。その流れで、中国から日本への観光を控えるよう国民に呼びかけています。来年はこの動きがさらに強まる可能性が高いでしょう。

大きな戦争は、小さな衝突が重なり、ちょっとした誤りが積み重なった結果として起きることが多いものです。遠くの出来事だと油断しているうちに、小さな小競り合いが続き、複数の偶発的な間違いが重なった時、一気に大きな戦争へ発展します。来年は、そのような誤りの連鎖が起きる可能性が極めて高くなったと私は思います。

そうした緊張が高まる場面で、高市さんが失敗をしても、すぐ謝るような対応をとるとは考えにくい状況です。現に、今回高市さんの発言に対して中国がすぐに反応し、批判を展開しましたが、外務大臣の茂木さんは、高市首相は過去の日本の方針を踏襲しただけであり、間違ったことを言っていないと説明しました。自民党も政府も一体となって高市さんを守る姿勢を示しています。

中国から見れば、日本が豹変したと見えます。日本を叩けばすぐに強い反応が返ってくると受け止められ、さらに大きな圧力をかけてくる動きが予想されます。そこにアメリカも加わり、事態が一層複雑化する可能性があります。

一触即発の中で、中国は何か起きた際、日本国内にいる中国人に対して抗議行動やストライキといった形で圧力をかけるよう指示を出す可能性があります。国内で小規模な衝突が起きることも考えられ、日本の中で不安定な状況が広がるかもしれません。以前から危険が高まると言ってきた流れが、来年ついに現実化する可能性が非常に高いと私は感じています。

恒例の質問

では恒例の質問に参ります。今年もそろそろ終わりです。年末が近づいてきました。

○良い日が続いたなと思う方

来年は、できるだけ良い日が続いて戴くとありがたいと思っています。

○嘘はつかなかったし、嘘をつかれてもいないと思う方

○有難うと言ひ、有難うと言われることが多かった方

「有難う」が沢山飛び交うのは良いです。来年は、ここに笑顔も加えたいですね。笑顔のあふれる国、笑顔のあふれる地域、笑顔のあふれる家族、これは素敵だと思います。

○身体の手入れをよくやっていると思う方

○自分磨きもよくやっていると思う方

○昨晚寝る時、「今日は、良い日だった。満足したな」と思って寝た方

さて、令和8年について少しお話しなければいけません。判断の三原則をベースに考えると、令和7年で取り上げたキーワードと同じことを繰り返しながら、来年はさらに悪い方向へ進んでいくだろうと思っています。

今の状況を改めて見直してみると、今年始めはシムックスの中でデジタルトランスフォーメーションを意識して取り組んでいこうと言っていたのに、今ではDXという言葉自体あまり使われなくなりました。代わりにAIばかりですね。AIについての話が一気に広がり、だんだんAIの存在感が増してきました。

AIを取り込める会社、AIを取り込める個人、そしてAIがごく当たり前のものとして扱える人達は、来年、著しく成長していくだろうと思います。企業もAIを活用したところは、さらに売上を伸ばし、利益を上げていくのではないかと感じています。

先日、市内の銀行に立ち寄って支店長さんとお話をしたところ、ATMを導入して本当に良かったとお聞きしました。これまで窓口業務では大量の紙を使用していたところ、ATMが普通に稼働するようになってからは、紙の消費

量が3分の2減ったそうです。コスト削減が大きく進み、それに伴い、他の業務でも同じような動きが多く出てきているとの事です。

銀行の話が続きますが、昨日は大宮にあるメガバンクの支店に行きました。行員の皆さんは一所懸命働いているのですが、殺伐としていました。AIが猛烈な勢いで仕事を動かしており、人間がその流れに追い込まれ、悲鳴をあげているような印象を持ちました。

トップクラスの銀行になると、あれ程まで人間性をすり減らすような働き方になってしまうのかと、その様子を見て思いました。AIへ過度に依存すると人間性が失われていくことも頭に置きながら、AIとは向き合っていくべきだと感じます。

来年は大きく変化のある「丙午（ひのえうま）」の年回りです。今年以上に混乱し、とてつもない時代へと導かれていくのではないかと考えております。来月は来年について、よりじっくりとお話を申し上げたいと思います。では、本日は有難う御座居ました。